

甌島の過疎化と出郷者の集団形成再考

田 島 康 弘

(1994年10月17日 受理)

Reconsideration on Depopulation in Koshiki Islands
and Group Formation of Migrants in Urban Areas

Yasuhiro TAJIMA

目次	頁
第1章 はじめに	31
第2章 甌島における人口数の変化	32
第1節 村別人口の変化	32
第2節 集落別人口の変化	33
第3節 中学校卒業人数の変化	34
第3章 人口構成の検討	36
第1節 村レベルの人口構成の変化	36
第2節 集落レベルでの人口構成の検討	38
第4章 出郷者集団の形成とこれをめぐる研究の動向	39
第1節 出郷者の行先と各地の集団	39
第2節 甌島郷友会研究の成果と今後の課題	41
第5章 結語	44

第1章 はじめに

本稿は、甌島の人口現象とくに人口数および人口構成の変化、人口移動などの解明とその持つ意味の考察を行い、これらと関連した出郷者の会＝郷友会を対象とする研究動向について若干の整理を行なおうとするものである。

社会集団の空間的現象の解明が、社会地理学が目ざすものである¹⁾とすれば、本稿はこの意味での社会地理学的研究の一環である。この場合、本研究における社会集団とは、都会に居住する出身地を同じくする者の集団を意味しており、その中でも集落単位のまとまりに、筆者はとくに注目している。

ところで、都会において形成される地方出身者の集団の中で、圧倒的多数は市町村レベルのものであって、集落レベルのものは「南島と北陸とに集中的に見られる」²⁾ことが松本により指摘されているが、甌島はこのどちらでもないにもかかわらず、集落レベルの会が関西や関東においては形成されており、この原因の解明もなされねばならないであろう。

また、近代以後、日本の農山漁村は都会とのかかわりを多かれ少なかれ密にしてきており、両者の関連は戦後、とくに日本経済の「高度成長期」に、農村部から都市部への大量の人の移動という形であらわれた。これ以前の戦前、とくに日本の工業化の時期にも、出稼ぎ的移動を中心としつつも一定量の定住を含んだ移動の形態があり、これ以後にも「流出」と「還流」双方の動きがある。

そして、出郷者集団の形成や活動が見られるのである。こうした動き全体を時間的かつ空間的に把握し整理することも、社会地理学的研究にとってはなされねばならない課題のひとつであろう。

本稿はこれらのことの一部を甑島に関して行い、さらに、研究の現段階と今後の方向について考えようとするものである。

そこで、第2章では、甑島における人口数の変化を2～3の視角から考察する。第3章では、甑島の人口構成の変化に着目し、人口構成の変化とその持つ意味について考察する。第4章では、甑島出身者の会の形成とこれをめぐる研究動向について、若干の考察を行い、問題点や今後の課題の整理を行いたい。

第2章 甑島における人口数の変化

第1節 村別人口の変化

各年の国勢調査のデータから村別人口の変化をみると、次のことが言えよう(第1表, 第1図)。

1) 戦前における各村の人口に、大きな変化はなかった。

第1表 甑島各村の世帯数及び人口の変化

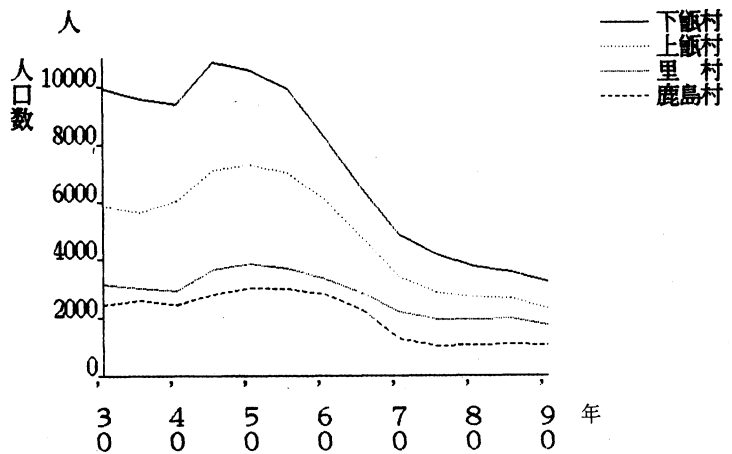
西暦	元号	里村		上甑村		鹿島村		下甑村		旧下甑村	
		世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1920	大正9	631	3009	1139	5517					2349	11535
	25	14	655	3017	1171	5509				2387	11745
1930	昭和5	647	3174	1203	5878		2446		9937	2457	12383
	35	10	620	3029	1221	5652	2589		9563	2540	12152
1940	15	601	2928	1184	6053		2433		9401	2423	11834
	45	20	654	3573	1265	7117				2562	13483
	47	22	725	3678	1371	7115		2820	10850	2767	13670
1950	25	759	3870	1392	7296	574	3032	2237	10546		
	55	30	723	3692	1403	7009	585	3010	2201	9918	
1960	35	696	3357	1381	6091	606	2811	2121	8237		
	65	40	655	2834	1221	4730	554	2254	1852	6438	
1970	45	620	2183	1102	3426	493	1277	1700	4864		
	75	50	614	1926	1092	2877	431	1023	1620	4176	
1980	55	631	1920	1120	2728	462	1028	1554	3752		
	85	60	673	1967	1120	2651	497	1072	1518	3577	
1990	平成2	636	1753	1017	2315	487	1033	1420	3247		

注：昭和24年4月 下甑村から鹿島村が分離した。これ以前の両村の人口は、下甑村(1993)：村勢要覧から知り得た範囲で記入した。

資料：各村の村勢要覧、上甑村郷土誌により作成

2) 戦後のまもない時期に各村とも人口数はピークに達した。これは下甌村では1947年、他の3村では1950年である。

3) ピーク時以後、各村とも人口減少をみているが、とくに1955年から'70年の時期の減少が著しく、この間の人口減少の割合を村別にみると、鹿島村(42.4%)、上甌村(48.9%)、下甌村(49.0%)、里村(59.1%)となつて、里村を除く3村は人口が半数以下となつた。



第1図 甌島の村別人口の変化

4) 1975年以降の動向、(すなわち1975年と1990年の人口減少の割合)をみると、下甌村(77.8%)と上甌村(80.4%)は減少を続けているが、鹿島村(101.0%)は横ばいであり、里村(91.0%)もこれに近いと言えよう。

5) 大きく全体的に、この間(1950年と1990年)の人口減少の割合をみると、下甌村(30.8%)、上甌村(31.7%)、鹿島村(34.1%)の3村でとくに著しく、里村(45.3%)は相対的には、ゆるやかであったことがわかる。

以上のことを確認して、先へ進みたい。

第2節 集落別人口の変化

以上の人口の変化を集落別にみると、集落によっても差のあることがわかる³⁾(第2表、第2図、第3表、第3図)。1955年と1990年の人口減少の割合から、集落の人口減少は次の3つのタイプに

第2表 上甌村の集落別世帯数および人口の変化

西暦	元号	中甌		江石		平良		小島		瀬上		桑之浦		中野									
		世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口								
1950	25																						
	55	30	362	1815	905	299	1421	715	286	1335	664	134	692	365	180	988	493	79	439	222	63	319	165
1960	35	360	1625	776	296	1146	535	281	1170	557	131	574	297	176	899	454	79	395	185	58	282	144	
	65	40	341	1354	632	214	716	321	245	917	420	121	468	232	172	787	388	79	321	149	49	167	71
1970	45	318	1021	459	165	451	201	236	697	311	114	314	139	158	610	292	70	220	100	41	113	47	
	75	50	331	918	424	153	369	170	232	594	265	115	284	122	152	456	220	67	155	71	42	101	43
1980	55	367	915	442	151	329	146	234	572	272	117	272	127	146	408	194	59	142	68	46	90	46	
	85	60	367	921	446	142	310	144	238	545	264	110	263	125	149	377	190	58	127	57	56	108	59
1990	H2	341	810	383	129	262	118	208	449	216	108	257	118	139	329	157	53	127	55	39	81	37	

資料：村勢要覧(1982年、1987年など)及び役場資料、1990年国勢調査により作成

分けられるように思う。

A) 人口の減少が40%台にとどまった集落

里(47.5%), 中甌(44.6%), 長浜(43.9%)の3集落。

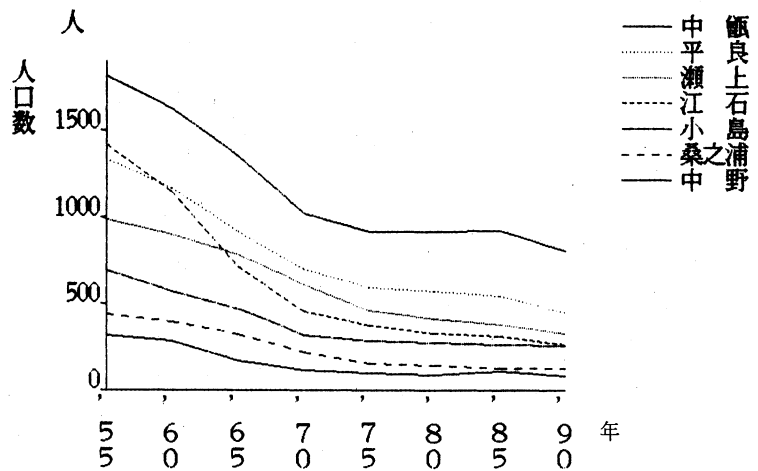
B) 人口が30%台にまで減少した集落

小島(37.1%), 平良(33.6%), 瀬上(32.3%), 鹿島(34.3%), 片野浦(36.3%), 手打(33.4%)の6集落。

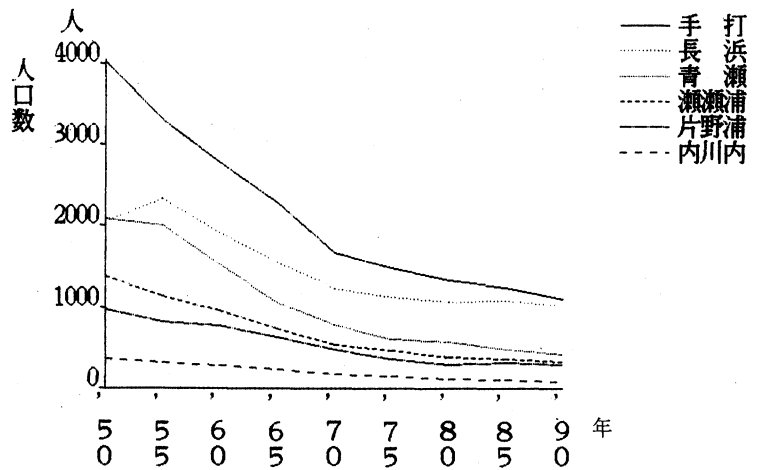
C) 人口が20%台以下に減少した集落

江石(18.4%), 桑之浦(24.8%), 中野(25.4%), 青瀬(20.9%), 内川内(25.1%), 瀬々野浦(28.4%)の6集落。

後にみる郷友会の形成や強さとこの人口減少の割合とは関係がないと言いきれるであろうか。一定の考察が必要のように筆者には思われるのである。



第2図 上甌村の集落別人口変化



第3図 下甌村集落別人口変化

第3節 中学校卒業生数の変化

人口の変化を捉える一つの指標とし

第3表 下甌村の集落別世帯数および人口の変化

西暦	元号	手打		片野浦		瀬々野浦		青瀬		長浜		内川内							
		世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口						
47	S22	815	4027	177	900	485	283	1374	662	439	2081	1055	439	2048	981	76	359	179	
1950	25																		
55	30	740	3302	1638	166	813	400	262	1145	563	434	2006	1020	525	2333	1166	74	319	148
60	35	716	2784	1338	172	773	389	252	959	462	415	1527	736	494	1913	964	72	281	117
65	40	640	2278	1083	176	634	302	228	739	349	331	1058	481	411	1544	792	66	230	97
70	45	563	1669	740	168	475	215	214	540	234	296	774	349	389	1230	626	69	176	68
75	50	553	1473	672	151	357	148	214	466	217	258	605	280	377	1126	580	67	149	56
80	55	535	1322	617	137	293	128	192	383	170	254	574	280	376	1069	563	60	111	47
85	60	536	1240	601	132	314	142	190	359	158	229	481	242	378	1081	568	53	102	45
1990	H.2	503	1103	527	132	295	133	170	325	147	192	420	203	380	1024	537	43	80	34

資料：第2表と同じ

第4表 中学校卒業者数及び進学率の変化

年 度 西曆 元号	里村	上甌村	鹿島村	下甌村	合計	上甌村		下甌村	
						進学者	進学率%	進学者	進学率%
1950	S.25								
51		213							
52		221							
53		196							
54		167							
55		175							
56		197				24	12.2		
57		173				17	9.8		
58		154				20	13.0		
59		180				24	13.3		
60	5.35	92	126	52	195	465	17	13.5	
61		69	118	34	177	398	18	15.3	
62		85	141	56	147	429	29	20.6	31 21.1
63		112	170	54	237	573	22	12.9	45 19.0
64		99	186	73	262	618	28	15.1	55 21.0
65		112	164	52	215	543	39	23.8	46 21.4
66		113	183	45	213	554	44	24.0	66 31.0
67		100	163	48	153	464	49	30.1	36 23.5
68		108	161	45	209	523	57	35.4	50 23.9
69		98	143	37	146	424	42	29.4	53 36.3
70	S.45	97	151	38	181	467	64	42.4	63 34.8
71		75	90	24	158	347	57	63.3	62 39.2
72		81	116	19	132	248	43	37.1	70 53.0
73		80	93	24	138	335	66	71.0	77 55.8
74		53	83	26	111	273	61	73.5	95 85.6
75		50	74	16	130	269	66	89.2	87 66.9
76		35	63	17	110	225	51	81.0	80 72.7
77		31	51	21	81	184	43	84.3	64 79.0
78		34	61	12	102	209	52	85.2	81 79.4
79		30	47	12	66	155	35	74.5	56 84.8
80	S.55	26	32	13	72	143	25	78.1	63 87.5
81		26	53	7	47	133	44	83.0	41 87.2
82		19	26	11	49	105	23	88.5	43 87.8
83		32	27	4	56	119	27	100.0	45 80.4
84		19	26	3	37	85	22	84.6	33 89.2
85		20	31	5	43	99	30	96.8	42 97.7
86		43	33	9	43	128	31	93.9	40 93.0
87		36	22	7	33	98	21	95.5	32 97.0
88		30	40	7	42	119	39	97.5	37 88.1
89		28	28	7	41	104	28	100.0	38 92.7
90	H.2	24	33	10	36	103	33	100.0	34 94.4
91		27	22	15	25	89	21	95.5	21 84.0
92		26	17	7	24	74	17	100.0	21 87.5
93		20	22	8	33	83	22	100.0	32 97.0

注：この表の進学率の計算には進学・就職者を除いており従って、これを含めた実際の進学率はさらに高くなる。
資料：鹿児島県統計年鑑（各年度）、上甌村100年、下甌村村覧要覧により作成

て、中学校卒業生数の変化をみておこう(第4表, 第4図)。

1958年以前の上甕村を除く他の3村のデータが欠落しているので、この間の他の3村の変化も上甕村とほぼ同様の傾向であると仮定して、戦後の動きをみると、全体的にはほぼ一貫して減少傾向にはあるものの、1965年頃までは、ほぼ横ばいの傾向を保ってきており、それ以後から1975年ぐらいの間に急激な減少がみられたと読みとれるように思う。1975年以降とくに80年以降は、

ほとんど横ばいの状態と言えようが、下甕村では75年から80年代のはじめにかけて、なお減少傾向が続き、78年度には4校が80年度には2校がそれぞれ合併している。逆に、里村では横ばいから増加の傾向すらみられ、90年以降の卒業生数は4村中で最も多いときもある。

以上の動きは人口の動きとほぼ対応していると言えようが、人口の減り方と比べて、やや遅れ気味のずれがあるようにも思われる。また、他と多少異なる、近年の里村の動き方なども、30~40年代の壮年層の定着を暗示する動きとして注目されよう。

第3章 人口構成の検討

性別・年齢別人口の構成は、その村の特色を示す一つの指標と言えよう。本章ではこれを示す人口ピラミッドについて検討しよう。

第1節 村レベルの人口構成の変化

まず、村全体の人口ピラミッドを5年毎に作成し、比較してみよう。この場合、甕島4村の中では下甕村の人口減少が、先に見たように最も著しいので、下甕村の場合を例にとって検討する(第5図)。

1) 1946年~55年

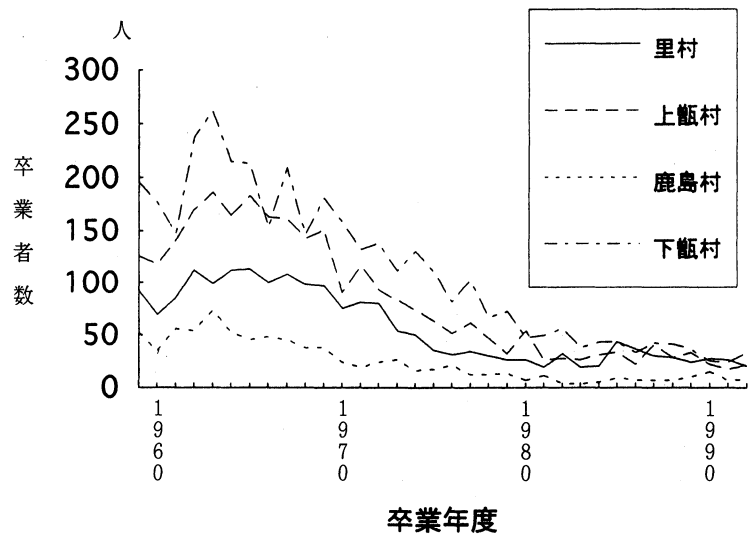
1950年のデータが得られないので、そのかわりに1946年4月のデータを使用する。

①1946年の人口ピラミッドの形は、男性壮年層(20~40代)のへこみを除くとほぼピラミッド型をしており、これが過疎化開始以前の姿であると思われる。

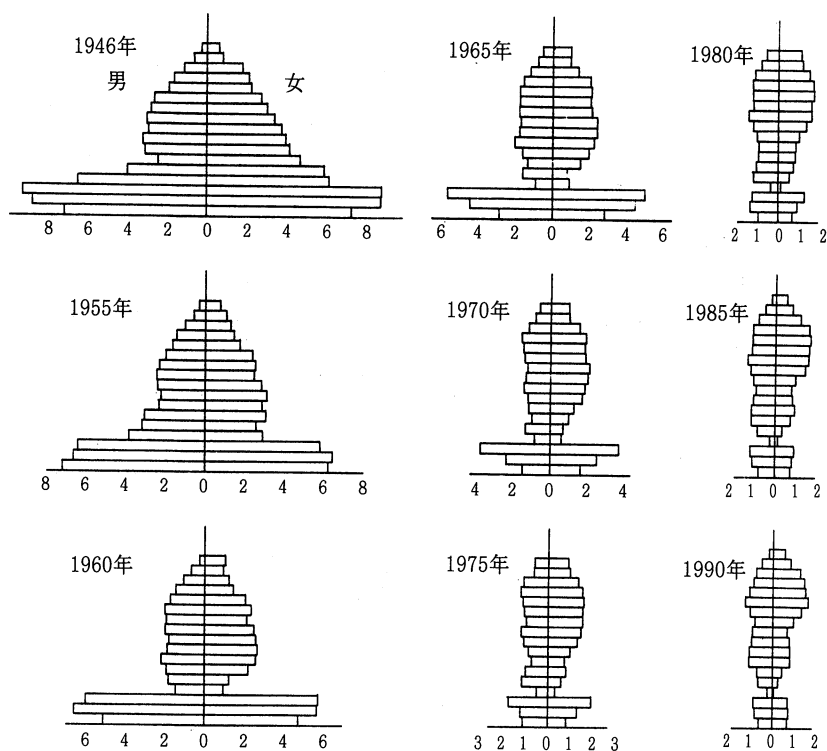
②男性壮年層のへこみの原因は、1) 戦争の影響、2) 出稼ぎによるための2つが考えられる。

③1955年の人口ピラミッドの方は、さらに女性若年層(10代後半~30代前半)のへこみもみられる。

これは、1) 出稼ぎ、2) 就職のよる流出等のためであると考えられる。



第4図 村別中学校卒業生数の変化



第5図 下甌村における人口構成の変化(単位100人)

この間は、青年期女性の減少を特に顕著とした文字通りの全階層的減少期と特色づけられよう。

2) 1955~60年

この2つの人口ピラミッドを比べると、高齢者層を除きほぼ全階層的に減少がみられ、とくに、青壮年層なかんずく10代後半~20代の青年層の減少が目立つ。又、若い女性の絶対数が著しく減少している。この時期は青年層の減少をとくに顕著とした高齢者層を除く全階層的減少期と特徴づけられよう。

3) 1960~65年

60代以上の高齢者を除き、全年齢階層的にはほぼ同程度の減少が見られ、とくに14歳以下の減少が著しい。

この時期は、子供層の減少をとくに顕著とした高齢者層を除く全階層的減少期と言うことができよう。

4) 1965~70年

上記の3)とほとんど同じ傾向で、高年齢層を除き全階層的な減少を示し、とくに子供層で顕著である。

5) 1970~75年

青壮年層のこの期間の減少はほとんどみられず、14歳以下の子供層のみ大きな減少を示している。これは、子供を生み育てる層の社会減少に伴う子供層の自然減少を意味するものと思われる。

6) 1975~80年

上記と同じく14歳以下層の減少の他、15~19歳層の減少も目立つが、この他ではあまり変化がない。

7) 1980~85年

40代女性の減少がやや目立つ程度で、この他はほぼ同形である。

8) 1985~90年

子供層、20代、50代で多少の減少が見られるが、ほぼ同形と見ることもできよう。

以上をまとめてみると、1950年代前半までの青年期女性の減少を顕著とし、高齢者の減少をも含む、文字通りの全階層的減少的（第Ⅰ期）、50年代後半の青年層の減少を顕著とした、高齢者層を除く全階層的減少期（第Ⅱ期）、60年代の子供層の減少を顕著とした、高齢者層を除く全階層的減少期（第Ⅲ期）、70年代の14歳以下層の減少のみが目立つ子供層減少期（第Ⅳ期）、80年代の子供層の減少すら停止した無変化期（第Ⅴ期）の5つの時期に区分できよう。このうち、第Ⅱ期と第Ⅲ期とは、高齢者層以外の全階層で減少が見られた時期として、まとめて扱うことも可能であり、そうすると、全階層減少期、青壮年と子供層の減少期、子供層のみの減少期、無変化期の4期の区分となろう（第5表）。

第5表 人口構成の変化の時期区分

時期	年	子供層 0～14歳	青壮年層 15～64歳	高齢者層 65歳～	特 徴
I	1946～55	—	— (とくに青年期女性)	—	全階層的減少期
II	1955～60	—	— (とくに青年層)	—	青壮年層及び子供層減少期
III	1960～70	— (とくに子供層)	—	—	〃 〃 〃
IV	1970～80	—	—	—	子供層のみの減少期
V	1980～90	—	—	—	無変化期

注：—は減少を示す

第2節 集落レベルでの人口構成の検討

人口構成は集落のちがいによってもかなり異なる。そこで、1990年における甑島15集落（上甑村7，下甑村6，里村1，鹿島村1）の人口構成について検討しよう（第6図）。

まず、全体にはほぼ共通することは、1）59歳以下の労働力人口が少なく、とくに青年層（15～29歳）が極端に少ないこと、2）逆に、60歳以上の各層はほぼピラミッド型をしていて人数も多く、とりわけ女性の人数が男性をうわまわっていること、の2点である。

次に、これら各集落の人口ピラミッドは、主としてその規模の違いから、大、中、小の3つに区分することができよう。すなわち、大規模型は里、鹿島、中甑、長浜、手打の5つであり、中規模型は江石、瀬上、小島、平良、青瀬、瀬々野浦、片野浦の7つであり、小規模型は中野、桑之浦、内川内の3つである。

大規模型の5集落はいずれも各村の中心集落であり、長浜以外の4集落には村役場が置かれている。人口ピラミッドの特色では、規模が大きいことその他、子供層及びその親の世代に当る30代後半を中心とした壮年層がかなり存在することがあげられよう。また、長浜は男性の青壮年層とくに20代前半層がきわだって多い。これは、長浜地区に存在する航空自衛隊関係者の存在によるものと思われる。事実、集落内における鉄筋四階建ての自衛隊関係者の住宅群は目をひいている。

中規模型集落は高齢者中心の4集落（江石、瀬上、瀬々野浦、片野浦）と30～40代を一定程度含

